

第 9 回 伊豆文学賞優秀賞（2005）

小説

初照

なぜ、入江にひかれるのだろう。

知り合いのヨット乗りも、知り合いでないヨット乗りもどちらも「いいね、入江は」といった。知り合いのほうは、「だれもない、閉ざされたところに身をおくのは、幸せだからね」といった。「男というのは、秘密の場所がすきなんですな」と知り合いでないほうもいった。

知り合いのヨット乗りのほうは、ジェット旅客機のパイロットでもあった。大空にはたしかに、入江はない。周りを囲まれてこっそり隠れる場所など、あるはずはない。

と、私は思ったのだが、あるとき、フランスの小説家でもあり、飛行機乗り（当時はプロペラ機だが）でもあったサンテグジュペリの短編「夜間飛行」に、空の入江の描写があった。それはこんな具合だ。

≪突堤を通過した小船のように、機は安全な水域に入った。幸せな島々の入江のように、見知らぬかくされた空の一部にとらわれたのだ≫

嵐で荒れ狂う数千メートルの厚い雷雲をぬけて上昇した機が突如、異様な静寂の空域に達した状態を描写している部分だ。

ここだけでなく、その小説のあちこちに憧れや幸せの比喻としての海があらわれる。飛行機乗りもまた、入江が恋しいのだ。

私は自分のヨットで伊豆半島の西南沿岸の入江という入江を探索してみた。普通のヨットなら入れないような、浅い砂浜のような入江でも、私の特殊なヨットは接近できる。水際が柔らかい砂地なら、乗り上げることもでききる。最初はこわごと、だんだん大胆になり、そのうち秘密でもなんでもなくなりました。しまいにはあきてしまう。本当にかくされた入江などない、ということも分かってしまう。海外の写真などみると、人工物がひとつも

ない大自然のうつくしい島影に、ほんとうに  
夢みるような紺碧の入江があつて、そこにま  
たうつくしいヨットがかんでいるのだ。だ  
が、日本では、そんなところはありえないに  
決まっている。そういう奥まつて安全なこ  
ろにはかならず漁をする人が住んでいるし、  
漁港があつたり魚網があつたりする。奇跡的  
に人間の生活がなかつたとするとこんどは、  
ホテルなどリゾート施設ができてしまう。  
第一、夏は台風がしばしば襲い、冬にはご  
うごうと風が吹きすさび、数メートルの高さ  
の波が押し寄せる沿岸に入江があるはずがな  
い。波が入江を削り取つてしまふし、そこが  
人間の生活の場なら、防波堤が作られて波を  
入れないようにする。そうなればもう入江は  
入江でなくなる。入江でもそうだ。伊豆半  
島の下田から南にかけてうつくしい砂浜がつ  
づく。しかし台風がしきりに来襲するここ数  
年、砂が波にさらわれて喪失ははじめた。

波は砂を七つ運んできて三つを持って帰るという。だから砂は四つのこつて、しかもいつも入れ替わるから、きれいな砂で浜が保たれていたのだ。

ところが近年は温暖化のためか事情が変わって、波は七三制ではなく、三七制になった。つまり、三つのこして七つ持っていく擽取の構造になった。

先日、私が気にいっていた入田浜に行ってみて驚いた。以前は、陸に一面に薫るハマゴウからゆるやかに砂は傾斜して、ずっとさきでゆるやかに水に出会い、海の底をまたゆるやかに沖までつづいていた。ゆるやかな波打ち際には、やさしい波がすう、つとよせてきて、さらさらと沖に戻っていった。

ところが、みると、砂はハマゴウの群落の下からいきなりえぐり取られて崖のようになり、底に堆積していたはずの膨大な量の砂はさらわれて消えてなくなった。食い荒らされた崖は延々とつづいて、ぐんと低くなった水

際に波が容赦なくたたきつけ、一層侵食を激しくした。砂地の底に深く埋もれていた岩礁が露出してむき出しになってきた。崖と岩礁となれば、もはや砂浜とはいいがたい。地元の人には、そのうち砂はもどってくるさ、といい、ローカルサーファーはいい波になった、とすこしもがっかりしていない。海と海岸は実はいつもはげしく変貌している。

半島のあるところに、たった一つ、私がはいったことのない入江がある。しかも砂浜が波にさらわれないうところか、入り江の一番奥を、完全な半円形をえがいて、まるで宝石の首飾りのように、入り江をふちどっている。なぜ、私が入ったことがないかというところ、入れないからだ。そこに沖から侵入するには、無数の危険な岩礁の間をすりぬけ、浅い海底を回避して、安全な水路を発見してはじめて到達できるよ

うな、非常に拒絶的な環境にあるからだ。そうなるたますます侵入したくなるのが人情だ。そこは小さな漁船が数艘浜に上げてあるので、小船は出入りしているのだが、クルーザーヨットでそこに乗り入れたヨットマンはまずいない。つまりヨット乗りにとっては処女の入り江だった。ついにあるとき私のヨットで侵入を執行してみる気になった。それは夏が過ぎて九月に月がかわり、海水浴客もいなくなり、海が一層の平穏さをとりもどした季節だった。

2

私は海の旅に出るときは、腕時計をしない。日常の時間を捨ててゆく、といった映画にありそうなロマンティックな行為からではない。腕輪が船の索具に引っかかって邪魔だからだ。しかし航海で時間を捨てることはできない。干潮満潮、ノットや燃料の計算など、どれも

時計なしでは成り立たない。だから私は舵のちかくで視野に入りやすいハッチの外壁に、安物の、文字盤を針が指す古典的な時計をはめ込んでいる。防水の、水色の時計は、いま朝の七時過ぎを示していた。約束の時間はとうにすぎているのに相棒がやっつてこない。しばらく待ったが、このまま時間を浪費したくなかったので電話をかけてみようとしてみた。そのときメールの着信音があった。開いてみると相棒の悠子からだった。「いっしょに行けなくなりまして。ごめんなさい」ただそれだけのメッセージで、理由はない。悠子は三十歳の微妙な年頃で、私は六十歳という微妙でもなんでもない歳だ。だが二人の関係は微妙で、いっしょに行けない、という悠子のメッセージも、今後の二人の関係を暗示して、微妙な意味にとれた。雲が流れている。風見私は空を見あげた。雲が流れている。風見

の赤いリボンが勢いよくなびいている。風が強くなるかもしれない。ひとりで今回のクルーズの目的を果たすのはむずかしい。難所の岩礁地帯をぬけるのに、船首に立って進行先の状況を監視する、信頼できるワッチがいる。浅瀬に地雷のように潜んでいる暗岩の上を越えられるかどうか、水深をすばやく判断しなければならぬ。素潜りに長けた悠子の眼が絶対に必要だった。風が強ければ、暗岩には波がくだけて危険は倍化する。加えて出航時間がおくれているので、いまからそこに向かっても満潮時を逸してしまふ。いずれにしても出航はやめよう。ヨットの舳いを取りなおして栈橋に移った。陸路、半島の反対にまわり、須崎半島先端の爪木崎にむかった。爪木崎は冬の水仙が有名で、多くの観光客がやってくるので、バスや車のための有料の駐車場があり、土産屋や食堂がならんでいる。

いま、九月の平日、人影はまばらだった。駐  
車場のはずれの高台から爪木崎灯台が間近か  
にみえる。白亜の灯台はなだらかな丘陵の先  
端にある。丘陵と私の立つ高台との間の谷間  
に、私の目的の小さな入江があるのだ。  
私は高台にとどまったまま、砂浜の先の岩  
礁群を眺めた。すこし波立っているが、今は  
穏やかな風景だった。高所からみると、透明  
な水の下に潜んでいる暗礁を視認することが  
できる。沖から安全そうな水路を目でたどり、  
記憶に刻みこませる。  
なんと私はこの暗礁群を記憶するためここ  
に立っただろう。風があればあつたで、風  
と潮の動きを探り、波が高ければ高いで、く  
だけの波から水底に潜む暗礁の存在を知った。  
浜に接近したらあの地点で錨を投げ、そのま  
ま船を進ませ、脱出するときにはその錨を引  
いて船を戻す。しかし海底は錨が効くだろ  
うか、などと頭の中でシミュレーションを重  
ねたものだ。

しばらく観察したあと、入り江の浜辺に降りていった。波打ち際で立ち止まって、私は想像した。円形の砂浜の入江に白鳥のようにそっと浮かぶヨット、向こうには爪木崎の白い灯台が立つ。シユノーケルをしていた若者が、なぎさ近くで泳ぎをやめ、マスクをはずして岸にあがってきた。私は若者が立つ水の深さをみる。「水底に黒くみえるところは海藻、それとも岩ですかね？」

私は水からあがってきた若者にさりげなく聞いた。「いや、全部砂地です」

濡れた唇が答えた。

高台にもどり、はなれた公園に駐車してきた車まで歩いて帰りかけ、崖の下の海岸線に遊歩道があるのに気がついた。

磯におりてみると舗装されたレンガ色の道が荒り、樹林に入る。樹間からときどき海の断片

がみえた。  
やがて丘のように起伏のある広場にでた。  
桜の低い枝の下をくぐり、椿の林をめぐつ  
て道はしばらくつづいていた。なんだか果樹  
園のなかにいるときのような心地よさがあつ  
た。広場のはずれまでくると、そこからさき  
は車道に出た。そこは車道に出た。そこは車道に  
出た。そこは車道に出た。そこは車道に出た。  
私はこのおだやかな場所がすこし気に入つ  
た。もうすこし探索してみたくなつて、そこ  
からわかれていた樹林の小道に入った。  
とつぜん、まばゆい光があふれた。  
海にむかって開けた広大な岩盤の上に出た。  
ごつごつした岩肌一面にイソギクが繁茂しハ  
イネズが隙間を埋める。アザミやハマカンゾ  
ウの花が過酷な環境にもめげず可憐な顔をの  
ぞかせている。大地はゆるやかに海に向かっ  
て傾斜し、唐突に海におちこむ絶壁となつて  
いた。  
むこうに爪木崎の灯台がみえる。雄大な景観  
右手はるか、いま伝ってきた荒磯のずっと

だった。私は潮の香を胸に吸いこみ、眼下に打ち寄せる波濤をしばらくながめていた。

きびすをかえして振り返ると、私の右手十メートルほど離れた岩に背をもたせて座っている人の姿を認めた。女性で、長いゆるやかなスカートをはいていた。一心に本を読んでいて私の存在に気がつかなかったようだ。

そこは野の花がひとときわ密集して咲いていない。私が邪魔をしないようにそっと歩きはじめたとき、女性が顔をあげた。異国の女性だった。首をかしげて私をみつめ、手を振って私の名を叫んだ。

私はおどろき、立ち止まった。その人は立ち上がってスカートのエを本で払い、優雅な物腰で近づいてきた。

下田市でサンテグジュペリを原語で読む会がある。と地元の新報で知って興味をいだいたのは、彼の「夜間飛行」に入り江のくだりがあったからだ。

電話で問いあわせると、偶然にも、VOL DE ZUTR（夜間飛行）をテキストにする、ということ。でフランス語もろくにできないのに、顔を出してみた。

主催者は岡浩也、という下田の郊外に住む海外でも著名な洋画家で、画家としての活動の中心がながくフランスだった。で、フランス語とフランスの文化にたいする知識と経験は完璧なものだった。参加者の大半は余生を楽しんでいる人たちで、大学教授や地元文芸者、新聞社、外務省、商社などの経歴をもつていた。彼らのフランス語の読解力はあなどりがたく、私のような、大学の第二外国語でちよつとかじった程度のフランス語ではとてもおよばなかった。

会はおもに岡さんの瀟洒な自宅でおこなわれた。赤レンガと白壁の家というまさに絵に描いたような地中海風な造りだったが、その辺の別荘と圧倒的にちがったのは、背丈を越す鑄鉄の門にほどこされたアールデコ風な装飾と、海を見おろす庭園には見事なローズガーデンがあつたことだ。バラは夫人のほとんど熱狂的ともいえる丹精によつて、バラには不適な伊豆の気候にもめげず、多種多彩に咲き誇つていた。

そこまでバラを愛するのは当然イギリス婦人の特質だったが、夫人はフランス人の血もまじつていて、フランス語と英語は母国語だった。日本語もまたおどろくほど達者だった。会には顔を出さないが、会がお開きになるといつも、にこやかな笑顔で紅茶を参加者にふるまつた。私が即座に会を辞めなかつたのも、ヘレナ夫人の笑顔と紅茶のおいしさにひかれたことと、バラに関してはおも一家言あつて話が合つたからだ。

「夜間飛行」のなかで、入江について言及している部分が二箇所あり、その前後の読解のときだけ、熱心に参加したが、そのあとは足が遠のいてしまった。しかしその部分の原文だけはいまでも覚えている。

私がおもっていた文庫本の訳ではその二箇所はすべて「入江」と訳されていたが、正確には「停泊地」だったり「湾」だった、ということ。これを原文で知って、すこし失望した。

多分この高名な訳者も「入江」に幻惑されていて、停泊地も湾もいっしょくたに「入江」にしてしまったのかもしれない。

サンテグジュペリのこの短編が私をひきつけたのは、「入江」だけではない。飛行機の操縦士と通信士が、嵐に遭遇して計器が故障し目的地を見失い、燃料が尽き、絶望的な飛行をつづけている。確定した死へむかって、刻々と推移する非情な時間に身をゆだねながら、彼らは人間としての尊厳をいささかもうしなわない。

この作品に私は、天空と人間との対比、または調和、または慈愛を感じるのだ。それは海の上でもおなじだ。あるとき私がヨット乗りだと知って、岡さんが自分もヨット乗りではヨットを所有し、妻と随分乗りまわしたよ、と行って、そのうち夕食を食いにきて伊豆の海の話をしてほしい、と強く誘われた。招待が実現したのはある夏の夜で、古びた新聞紙に包んだ高級ワインを持参し、背中の開いたドレスに身を包んだ悠子を通してつづきのダイニングルームで私たちはもてなされた。広間には初めて入ったが、片面の大壁いっぱい、木漏れ日の竹林が、筆墨で見事に描かれた。もちろん岡さんの大作だ。本人の作品に接するのは私はじめてだったが、岡さんの東洋的な美意識が西欧でなぜ高く評価されたか、すこし理解することができた。

ヘレナ夫人の手作りの料理を堪能したあと、ウイスキーを頂戴した。帰りの車の運転は悠子にきめてあったので、私は遠慮なくアイラ島産の濃密なシングルモルトを味わった。酒をやりながら、サンテグジュペリがなぜ、海や島、入江にこだわったか、という話題になり、大空から事象をみつづける者にとって、地球は一体として認識され、惑星という視点になるからではないか、彼のほかの小説においても、海は常にイマージュされ、サハラ砂漠すら大海原と同一視されている、と岡さんは語った。

そのあとはイギリス沿岸のクルーズの思い出話になり、ヘレナ夫人もこのときは身を乗り出してセーリングの話に加わった。夫人はイギリス南西部の海辺で育ち、海が好きなので伊豆の海辺に住むことを希望したそうだった。ヨットマンと冒険についての話題になった。フランス人というやつは海の冒険がすきだね。世界一周のヨットレースなんか、大抵フ

ラン人の考えることだ。たしかサルトルだったと思うが、冒険、というのは、終わってみてはじめて成立するものだ、といった。虎狩りにいって首尾よく虎を仕留め、剥製にして居間に飾り客に自慢することが、つまり、冒険なのさ。失敗して虎にくわれちまったら、冒険ではなく、哀れな事件となる。冒険の最中というのもまた、惨めなことではないかな。

私の知人のフランス人ヨットマンは世界一周無寄航を達成した男だが、本人が私に告白した話では、食料が底をつき、腹が減ってしかたがなかった。ずっと食い物の夢ばかりみていたという。冒険とは腹ぺこのことでもある。

またこんな話もきいたことがあるね。嵐のときに揺れるデッキ上であやまって自分の舌を噛み切ってしまった、セールを縫う針で、舌の切れた部分を自分で縫合したという。恐ろしい話だね。私も・いやー

いいかけて暗い表情をちらりとみせ、不自

然に話を打ち切ると、「あなたは どう思います  
かね」と、私に話を引き取らせた。  
「冒険はその最中でもなく、終わってからで  
もないと、私は思います。冒険ははじまりに  
こそ、人をひきつけてやまないにかがある  
のではありませんか」  
「ほほう、どんな？」  
「憧れと期待、その達成への綿密な準備、危  
険に対応できるだけの自己鍛錬、危険への賭  
け、それこそ、わくわくさせる甘美なこと  
でしょう」  
「森が人をひきつけるのは、その快適さでは  
なく、緑陰の妖しさだ、とデユマはモンテク  
リストにいわせている。なにかありそうだ、  
という妖しさが人をひきつけるのかな。  
フランス語で冒険はアヴァンチュールだが、  
これは色事をする意味でもあるな。フランス  
人にとって、なるほど、アヴァンチュールは  
甘美なわけだ。色事の最大のよろこびは、た  
しかにあなたのいわれるとおり、その最初に

あるのであって、成功したとたんに色褪せるな。わははー

岡さんはあかるい表情をとりもどし、笑った。

辞するとき玄関で、今度ぜひヘレナをヨットに乗せてやってほしい。妻はひどく海とヨットを恋しがっているんだ、約束してくれ、と大分酔った様子で私に迫った。わかりました。いっしょにセーリングしましょう、と約束すると、岡さんはよろこびをあらわにし、約束したよ、といいながら、長身瘦躯をかがめ、私の手を両手で強く握った。

そのときはじめて気がついたのだが、いうより、岡さんが常に隠していたからそれまで気づかなかつたのだろうが、左手の中指の先端が欠損しているのを知った。

4

ヘレナは風でほつれた金髪をおさえながら、

私の前に立った。

「随分ながいことお会いしていませんね、でも結城さん、相変わらず日に焼けてとても元気そうね」

夕食への招待のあと、私は会から足が遠のき、三年近く経つ。

「すみません、ご無沙汰しております。ヘレナさんも元気そうですね。ご主人は？」

ヘレナは私をじっとみつめ、それから空を仰いでいった。

「ヒロヤは昨年、天国にいきました。ガンでした、肺の・・ほら、この空はこんなに青く、天国に近そうだから、時々ここにきて、夫に会っているのです」

私は沈黙し、天を仰いだ。どうなぐさめるべきか、言葉がみつからなかった。異国の女性に、日本式のありきたりの弔辞は無用に思えた。私は沈黙して岡さんの冥福を祈った。

ヘレナが沈黙を破った。

「ヒロヤも灯台がみえるこの場所が好きで、

二人でよくピクニックにきました。ここは人のしらない秘密の庭のようでしょう。ヒロヤはスケッチブックをもって、私はランチボックスをもつて。もちろんワインもね。でもね、あの人は、灯台など描くのは素人画家だといつてちつともスケッチしないで飲んでばかり。だから、ここは私たちの思い出の場所でもあるのです」

ヘレンが明るいので、私は救われた。「ここは私の生まれ育ったイギリス南西部によく似ています。岬に白い灯台があります。それに岩礁がいっぱい。爪木崎とおなじ」

「南西部というところですか？」

「いいえ。でもコーンウォールの境の近く、ハートランドという岬。牡鹿の島、という意味。実際は島ではないけれど。ところで、結城さんはなぜここにきたのです？」

「あの爪木崎の灯台の下に砂浜の入江がありますね。あそこにヨットを入れてみたくて、時々、調べにくるのです。ほら、岩がいつぱ

いありますし、水の下にもかくれた岩があります。潮の流れも速いし、とても危険ですね。どうやったら入れるか、調べているのです」

「結城さんのヨットはトライマランだったかしら？」

「ええ、そうです。喫水が膝くらいですし、やわらかい砂地なら、乗り上げても平気です」

「イギリスやフランスでは干潮時には数メートルも海面がさがりますから、ヨットや船は干上がった土に取り残されます。でもそれはあたりまえです。だから浅いのを恐れることはありません。それに私がついていきますから、大丈夫」

「え？」

「結城さん、忘れた？ ヒロヤと約束したでしょう。私をあなたのヨットに乗せるって。夫はあのとき、もう自分が死ぬことがわかっていました。自分の力では、私を海につれ出すことができないのを知っていたのです。だからあなたに約束させた。ヨット乗りは約束

を守るものです」

爪木崎の灯台までヘレナと私は散策する  
とにした。水先案内を申し出たヘレナにもあ  
の入江の水路を覚えてもらわなければならな  
い。遊歩道をひきかえし、ふたたび砂浜を観  
察して意見を交換し、それから浜を横切って  
灯台への道を登った。冬になるとこの岬はあ  
たり一面、水仙の匂いにつつまれるのだ。  
灯台にたどりつくくと、ヘレナは白いタイ  
ルが張られたすべすべした曲面に触れたり、裏  
にまわって窓をみあげたりしていた。  
私は正面に立ち、入り口の鉄扉の上にはめ  
込まれた碑をみた。青銅製のようだが塩で表  
面は白化し、浮き彫りにされた文字が三行並  
ぶ。一行目は「爪木崎燈臺」と旧字体で右か  
ら左に記されているのがはつきり読み取れる。  
二行目は二字なのだがかすれて判読できない。  
三行目は「昭和十二年四月一日」とある。私  
は入読めないといっそう好奇心をひく。私は入

り口の階段を数段登り、腕をのばして浮き彫りの二字を、視力を失った人が点字を読むように、右から左へと指の腹でなぞった。

≪初照≫

そう読めた。

その二文字は、この灯台がおびただしい光を夜の大海原に放った最初の瞬間を、七十年近い時空を超え、鮮やかによみがえらせた。

ヘレナは灯台をめぐる柵にとりつけられた案内板をみていたが、ここになんて書いてあるのか、と私にたずねた。プラスチックの案内板は観光客用に近年設置されたようだ。私は声を出して、灯台の設置の年月、光度や光達距離、高さなど施設の概要を読んだ。そのあと、つぎの文でおわっていた。

≪この灯台が設置以来、数多くの船人の命と貴重な財貨を人知れず救ってきたであろうことを想うとき、これからも夜毎美しい光を沖行く船に投げ続けるよう祈念するものであり

ます。下田市須崎区 ≡

「キネン？ *commemorate* のこと？」と、へ  
レナがきいた。

「いいや、祈る、という意味です。Let us pray  
かな」

私はしばらく考え、その一文をつたない英  
語に翻訳して、へレナに伝えた。へレナはじ  
つと聞き入り、真剣な表情で立ちすくんでい  
た。

5

それから数日後に、へレナは私の船の一部  
となった。というのは、へレナほどヨットに  
似つかわしい女性はめったにいなかった。  
人間にはそれぞれふさわしい場所があるの  
だ。すぐれた登山家は重い荷を背おって山に  
向かうとき、山岳の風景に溶け込む。多分、  
足取りや心の状態がそうさせるのだろう。  
ヨットもそうだ。ゆれる不安定なデッキに



回った。ヨットには船長それぞれの流儀があり、それらは船上のロープのまとめ方ひとつをみただけでもわかるものだ。点検がおわるのと、満足したように、私に微笑んだ。ヨットだけではない。ヘレナの存在にも異国人の違和感がまったくなかった。ヘレナの日本語はあまりにも自然なので、その表情やしぐさが日本的に見える。言語というのは、発音のための顔の筋肉を支配し、表情を変えらるばかりか、しぐさ、思考方法、精神にまで影響するのかもしれない。眼がとび色なのも日本人にとっては違和感がない。金髪を無造作に後ろで束ね、襟つきの半そでシャツとショートパンツ、それにリュックサックひとつの荷物、といういでたちだった。四十歳はすぎているはずだが、若さを失わず、船上での動きも自然だった。

用意はすべてできていたので、母港の松崎の河口からまもなく出航した。

朝八時、風はなく、帆走には向かなかったが、波もおだやかだったので機走し、半島の南西部沿岸にそって南下した。雲見をすぎると、半島の景観は人をよせつけない険しさをみせ始める。私はお気に入りの入江や水路にヘレナを案内した。垂直に切りたつ絶壁や流れ落ちる滝の下にぎりぎりまで接近した。

九月の海は十メートル以上見通せる透明度になる。海上だけでなく水中もまたうつくしい。ヘレナはときおり感嘆の声をあげた。浅そうなどころではヘレナは自発的に舳先に立ち、刻々とかわる水深を判断して私に伝えた。そのあたりの海底の様子を私は熟知しているのだが、私はヘレナの報告のたびに、手をあげて感謝の意をあらわした。そういうコミュニケーションが船上での信頼を築くからだ。波勝崎を左にみて、石廊崎に進路をむけたとき、ヘレナが十時方向の海面を指して、「りんご！」と叫び、「Treasure Island」といつ

た。たしかに、真っ赤なりんごが一個、浮いていた。スチーブンソンの「宝島」の話だが、ジム少年がりんご樽にかくれてりんごをかじっている。と、それとはしらずに海賊たちがあつまってきた。船の乗っ取りの密談をはじめ。ひとり、海賊がりんごを探して短剣を樽にさしこみ、ジム少年に刃がおよぼうとしたとき、陸がみえたぞ！という見張りの声で救われるという一節がある。海面に漂うりんごをみて、ヘレナはその場面を思い出したにちがいない。少年の私を海の冒険へと夢みさせたのは、この「宝島」だった。私だけでなく、イギリスの少女の心も「宝島」はつかんでいたらしい。なぜそんなところにりんごが浮いていたか、私にとってしばらく謎だった。波勝崎には野猿の餌付け場があり、餌として投げたりんごが海面に落ち、漂流したのではないかと、やがて私は思うようになった。

半島の先端、石廊崎から下流（したる）までは潮の流れで波立っていたし、この海域は意外なところに岩礁が潜んでいるのを承知していたので、注意をおこたらなかった。下田の沖から須崎の漁港沖にさしかかる。潮がはやい。この周辺は浅く、根が縦横に走っている。舳先が波濤を切りさいてしぶきがあがる。 「フライングフィッシュ！」

ヘレナが前方をさす。数匹の飛魚が銀色の羽をきらめかせて、ヨットの前をあらそって飛ぶ。飛魚のおどろくほどの飛行距離にヘレナは感心している。

潮を熟知している地元の漁船が数艘、根にあたって砕ける波にもまれながら操業している。海は生命にあふれているのだ。

爪木崎と灯台がみえてくる。まもなく、目的の入江の沖に到達する。私があらかじめ進入路の目標にしておいた岩礁に船を寄せてみる。そこからまっすぐ、岩礁の間はずっと奥

に白く輝くあの砂浜がみえる。陸の高台から立体的にみてきた海面と、海上の沖合いからみる海面とはまるきり印象がちがう。潮が満ちてくるのは数時間後。波がおだかやで風がなく、満潮時は潮もとまり、護衛の岩礁たちはすっかり油断しているはずだ。そのときこそ、侵入の絶好の機会だろう。満潮になるまでは、様子を探る程度にして、岬をまわって、その先の九十浜に投錨した。ここは海底がずっと砂地で、錨は確実に船を留めた。私はエンジンを止め、ハッチをあけた。十二時も半ばをすぎている。クーラーボックスにひそませたワインに手をのばしたが、触るだけにして、簡単な食事をヘレナと済ませ、二時二十分の満潮まで休憩することにした。ヘレナはここになんども泳ぎにきたことがあるそうで、さっさと水着に着替えると、なじみの海に飛び込んだ。はじめはみごとにな

ロールで船のまわりを泳いでいたが、そのうちそんなにまじめに泳ぐのが馬鹿馬鹿しくなつたのか、のんびりと水に浮かんでいた。船上にもどると、ヨットの両舷に張られたネットの上にもどると、大胆に手足を広げて、仰向けに寝て陽を浴びた。二時、私は錨をひきあげながら、すこし胸が騒いだ。あの目印の岩礁の前までもどった。ヘレナが水着のまま船首に立った。そして私にふりむき、にっこりと笑った。その母のような笑顔で、私の緊張はうすらいだ。エンジンは手をあげて進入を開始する合図をした。害物にあたったら跳ねあがるようにセットした。岩礁の間をゆっくりと船をすすめた。私は立ちあがり、足先でテイラー（棒状の舵）を操作した。すこしでも高い視線のほうに水中をみとおせるからだ。ヘレナは前方水面を凝

視し、腕をまえに振って前進が可能であること  
とを私に伝えつづける。  
岩礁たちが後ろへすぎてゆく。私のシミュ  
レーションした水路ではこのあたりで暗礁を  
さけて右に一度曲がることになっていった。私  
は舵をきって右に舳先をむけた。しばらくす  
すむ。砂浜は目前だった。  
と、ヘレナが叫んだ。  
「あぶない、岩！　ゴウアスターン！」  
私はエンジンのレバーをリバーズにぶち込  
み、急激に回転をあげた。船は進行をとめ、  
後進しはじめた。ヘレナがふりかえり、先ほ  
どの水面を指さしてから、両手で三十センチ  
ほどの深さをしめした。そして胸に手をあて  
てほっとしたしぐさをしてみせた。  
私は右の水路をあきらめ、まっすぐのコー  
スをとった。船べりからのぞくと、進路の海  
底はまっしろな砂地だった。そこに満ちる海  
水はラリックのガラス細工のように光を交錯  
させ、入り江の中心へとひろがっていた。

沖から砂を運びこみ、計り知れない年月を  
かけて最奥部に砂浜を作りあげたのは、この  
水路だ。いま、海からの客をむかえようと敷  
きひろげられた水の絨毯だ。  
いいぞ、いいぞ。この進路だ・・。  
入り口を護衛していた岩礁たちは私たちを  
無視してすぎさる。ヘレナももはや水底をみ  
ることをやめ、まっすぐ前方をみている。  
入り江は、私たちの眼前にある。  
海の神秘の乙女は私たちとヨットを抱擁し  
て迎えようと、白い腕をいっぱいに広げた。  
私たちはついにその腕に抱かれた。  
ヘレンと私も抱き合ってよろこびを分かち  
合った。

6

十五分後には、私たちがそこを去っていた。  
その入江は長くとどまる場所ではない。潮が

引いたら出られなくなる。風が吹き始めたら狭い入江の端に吹き寄せられるだろうし、護衛たちも眠りから覚め、波の剣をふりかざして容赦なく襲いかかってくる。そこから程遠くない、奥深く広い湾となつてゐる田ノ浦へ船を入れ、停泊することにした。ここは何度も停泊した湾だから、心得てゐる。湾の中央で船首から投錨し、すこし後進して錨の効きを確認してから、設置されてゐるブイに後尾を舫う。こうして船の前後を錨とブイに舫えば、船は安定して、風向きが変わってもふれまわることもなかった。いつもの手順で投錨し、ブイを拾おうとしたとき、左手にするどい痛みが走った。ブイのロープに付着していた貝が私の中指の腹を切つた。私は手を引きあげ、傷を調べた。血が滴っていたが、深い傷ではない。海での傷は化膿しにくい。私は中指の根元を強く押さえて止血しようとした。そのとき、私の傷に気がついたヘレナが、

叫びをあげた。いきなり私の左指をつかみ、  
へレナの口の中に入れた。  
私は動揺して、指をへレナの口腔から引き  
抜こうとしたが、へレナの異常に強い力が手  
首をつかんでいた。錯乱しているような、た  
だごとではない様子だった。  
しばらくくしてへレナは放心したように私の  
手をはなした。  
「ごめんなさい。血をみたので、アップセ  
ットしてしまったのです」  
そういつて静かに船首に行き、パルピット  
に手をかけてしゃがみこんだ。  
たおだやかな海面で迎える夕暮れは、私を安  
息させる。  
禁断の入江について到達し得たことが、い  
まゆつくりと、潮がみちてくるように、私の  
心を満たしていた。冒険は、その行為そのも  
のが目的ではなく、艱難のすぎたあとの安ら

ぎこそが、本当の目的ではないだろうか。人に語り聞かせることではなく、ひとり、心のなかでいつくしみ、反芻するもの。

この湾は私のお気に入り、本当に静かな湾だった。人家はなく、私たち二人以外、だれもいない。私はシートをひろげてコクピットをおおった。電池のランプを灯してブームに吊り下げた。テーブルを出して食器をならべた。これだけのことで、船の上にあたたかな、人間の営みの場がうまれた。ヘレナはすっかり落ちつきをとりもどし、ギャレイに立って、夕餉の用意をしてくれている。クーラーボックスに入れておいたトマト、レタスで簡単なサラダをつくり、包装された袋からスープを鍋にあげてあたためている。パンにチーズを塗る。焼いたチキンとハムを切って皿に盛る。私は冷えた白ワインの栓を抜く・・。

夕闇が濃くなり、月が昇った。

私は深夜目覚め、デッキに出て錨が流されてい  
ないかを調べた。かすかに揺れるマストの上  
に月がかかっていた。みあげていると、揺  
れているのは月のほうではないかと思えた。  
私は傷ついた中指を月の光にかざした。傷  
口はふさがって、痛みも消えていた。  
私はあることに気がついた。  
そうだ、左手の中指だ。岡さんの指が欠け  
ていたのは・・・。  
私は船尾のバースでひとりしずかに眠って  
いる。ヘレナを思った。

7

秋もいつの間にか終わり、十二月に入ると  
大西（おおにし）とよぶ強い季節風が吹くよ  
うになり、春のはじめまでつづく。  
ヘレナとの爪木崎への旅のあと、何度か船  
を出したのだが、西伊豆から石廊崎まで、

半島を東にまわることはなかった。  
ヘレナがまた船にのりたいと希望していたので、誘ってみようと電話をかけたことがあった。だが電話は取りはずされていた。  
私はヨットを陸にあげて冬籠りさせた。  
年が明けて、爪木崎は水仙の季節になった。  
私はひさしぶりに爪木崎にいつてみようと思  
い立ち、途中、下田郊外のヘレナの自宅に車  
で寄ってみた。鉄の門扉には錠がかけられ、  
そこから見通せる庭は荒れ、芝はのび放題で、  
ヘレナが手塩にかけていたバラも雑草に埋も  
れていた。  
私はあるじを失った岡邸をあとにして、爪  
木崎にむかった。  
灯台下の砂浜の入江の上を冬の風が走り、  
沖の岩礁は白い波の牙をむいていた。入江は  
封印されたのだ。

\*  
\*

春の兆しが増し、陽だまりでヨットの手入れをはじめかけたころ、一通の航空便が届いた。ヘレナからの、英文の、手書きの手紙だった。

「結城さん、いかがお過ごしですか。爪木崎への旅はわすれられない思い出でした。沖から伊豆半島の南部をながめられたのは幸運でした。半島は緑豊か、海もダイナミックに息づいていて、とてもうつくしい。また伊豆の海にあそびたかったのですが、残念ながら私は日本を去ってしまいました。うか、とても迷っていました。亡き夫を偲んで下田にとどまるか、それともイギリスに帰ってあたらしい人生をはじめめるか。・・

あなたの灯台まで歩いたとき、あなたは灯台の案内板を読んでくれました。じつはあの最後に書かれた文章が私の生き方をきめたのです。

私は医者でした。ヒロヤと結婚してから医者はやめていました。結婚生活のためだけに、はなく、ヒロヤがヨットで指を潰して入院し、担当医の私の処置がおよばず指先を切断せざるを得なくなったとき、外科医としての自信を失ったからです。私は医者としてまだ駆け出しで、未熟だった。

田ノ浦の湾であなたが偶然おなじ中指を怪我したとき、私はそのことを思い出して動転してしまいました。あの子の私の行動を不可解とお思いました。しょうが、なにとぞお許しください。

灯台の光が、いくたの人々の命を救ってきた、そしてこれからも救いつづけるよう祈る、とあなたが読んでくれたとき、私は医者として、人々の命を救いつづけるべきだ、と確信したので。たとえどんなにちっぽけでもいい、私自身が白衣の灯台になり、人々の命に光明を投げつづけるべきだ、と。

いま、生まれ故郷の小さな病院で、医者として

してやり直そうと  
しています。ときどき岬  
で散歩します。岬の先  
のハートランドの白  
岬の灯台を眺めるた  
びに、爪木崎の灯台  
を思い出します。そ  
れは私の人生にあら  
しい光をあたえてく  
れました。

あなたのことから  
の友、ヘレナ  
私は手紙を閉じ、  
左手をひらいた。  
ヘレナが口に含ん  
だ中指をみつめ、  
その指で触れた「  
初照」という二文  
字を思い起こし  
た。

完